

『贅沢な孤独』

作者 浅羽一

風呂場でのぼせて吐いていたら、いつの間にか日付が変わって誕生日を迎えていた。頭を拭きながら何気ないふりをして携帯電話を開いてみても、着信や新着メールは一つもなく。鼻の奥には、しつこい喉の痛みを治そうとうがい薬代わりに流し込んだアブサンの香りが、胃酸と一緒にこびりついてた。

後頭部から頭全体へ、頭蓋骨と脳みその間を這うように広がる鈍痛は、果たして風邪のせいか、それとも酒のせいか。いずれにせよ、冴えないことに変わりなく。今年こそ、誰と迎えようとか、何処へ行こうとか、何をしていようとか、誕生日なんて気にしていない風を装いながらも密かに考えていたのに、結局、どうやら例年通りの、いや、或いはそれ以下の内容になりそうだった。

下着とTシャツを身に付けて、ベッドの上へ。けれどすぐに布団を被ることなく、ぼんやりと携帯電話を操作した。画面には、この季節に相応しい煌びやかな光景が、それからさらに四季折々の景色や珍しい映像が入れ替わり立ち替わり浮かび上がる。暖房の音が部屋中に響いて、全身が乾いていく。

色んな場所へ行って、幾枚もの写真を撮った。近場は勿論、数時間を掛けて車を走らせ、ほんの一瞬の出来事に感動してシャツターを切り、また数時間を掛けて帰るなんてこともしばしばあった。例えば、良く晴れた昼間の海沿いでは昔に流行ったJ・POPを流したり、深夜の高速道路に入ったら洒落たモダン・ジャズやフュージョンに変えたり、はたまに町中で渋滞に捕まったら敢えてノリの良いロックの音量を上げたり、長時間の運転の最中にはいつも何かしら音楽があった。そして助手席には、これまた決まって一冊の地図を載せていた。

大抵の場合、一人だった。少なくとも、綺麗な写真を何枚も撮影している時はそうだった。要するに自由に動けるからだ。だから、誰かと一緒に出かけた時の写真はほとんど無かった。ましてや、そんな相手と二人で写っているものは一枚もなかった。

そのせいなのかも知れない。記憶の中にしか存在しない風景が、構図やカメラの設定に凝って切り取った瞬間よりも、遙かに美しく、また懐かしく感じられるのは。人の思い出なんて曖昧なものだ。だとすれば、かつての日々を都合良く美化してしまっていたとしても、不思議じゃない。それどころか、ともすればそんな時間が本当にあったのかどうかさえ疑ってしまえる。現に、誰かが隣にいてくれて、誰かと寄り添っていられた、その証拠を見せろと言われても、手の平に治まる程度の冷徹なメモリーの何処を探したって、そんなものは存在しないのだから。

かちかちと親指だけを動かしていく。ふと、時間が止まっているような錯覚に陥りそうになるけれど、画面の上部に表示されているデジタルの数字と充電電池の残量が、逃避しようとしているこちらの腕を乱暴なくらいに掴んでくる。

そろそろ眠らなければ。このままでは、明日：もとい今日、外出する為の体力も気力も取り戻せなくなってしまう。そうなれば、いよいよ負け組だ。いや、それ以前に、こんな日に何の予定もない時点ですでにそうなのかも知れないけれど。

自分でもおかしな話だと呆れるし、ましてや自惚れているつもりなんて皆無なのだけだから、誘ったら応えてくれそうな異性は、決して多くなくとも確かにいた。でも、残念なのが、それは自分が恋愛下手なせいなのか、それとも単に未練がましい性格をしているだけなのか、ほんの僅かでも誘いたいなど、二人で過ごせたら幸せだろうかと想える相手に限

って、もうそれを許されない関係になってしまっていた。そして、そんな相手とかつて訪れた場所の思い出が決まって素晴らしいから、目の前にある多数の写真がまるで物足りなく感じられてしまうのだろう。

贅沢な孤独だと思う。もしくは、救いようのない我が儘か。いずれにせよ、一つだけ確実なことは、行き先がまだ決まっていけない。

と、咳が出た。一度、二度、三度目と四度目のタイミングがおかしくて、五度目をする前にむせてしまった。舌の付け根と声帯の間にある部分が虫にでも刺されたみたいな感じで、視界の端からちらりと緑色の瓶が誘惑してきたが、何とかそれを振り払った。薬草を煎じたような独特の香りと火気厳禁の荒々しさは、一時の誤魔化しとしては最高なのだけれど、その代償は容赦なく大きい。いつの間にか、髪は完全に乾いていて、唇の表面はかさついていた。

もう本当に寝よう。いい加減にそう考えて、携帯電話を枕元に置いた。でも、そこでふと思いついて、再び携帯電話を手取る。目覚まし時計の設定は何時にしておくべきか。ちよつとだけ思案した後、とりあえず昼頃にアラームが鳴るようにした。さすがに朝一から出掛けることは辛いけれど、夕方以降だと出掛けること自体を諦めてしまえばいいから。だから。

今度こそ携帯電話を手放して、毛布と毛布の間に潜った。暖房を消して、電気も消して、途端に真つ暗で静かになった部屋で一人、結局、何処へ行くべきなのだろうと、睡魔がすり寄ってくるまでの間、ぼんやりと考えた。結論が出ないだろうことは分かっていた。どうせ最終的には、車を走り出させてからようやくよく、その時の気分次第で決められるのだ。だから、本当にただの時間稼ぎだった。或いは、一人きりの時間への慰めだった。寂しがり屋の孤独主義にすぎたる人間は、きつと皆、自らを慰めることに長けている。

多分きつと、自分のような人は他にも沢山いるのだろう。そしてだからこそ、余計にややこしい。一人一人が集まって二人や三人になるのではなく、一人一人がばらばらのまま集まって、一人と一人と一人と一人と…一人を大量生産する。それはさながら組み立てられる前のプラモデルのパーツのごとく。枠の中で、隣り合いながらも決して重ならないパーツが大小合わせて幾つも並ぶ。問題は、そんなパーツを根気よく組み立ててくれる手が、またはどのパーツ同士が補完し合えるのか説明されている設計図が、現実には存在しないと言うこと。だけど、それは言い換えれば、完成形を限定されていないと言うことでもあって。そしてだからこそ、そんなややこしさが、普段は面倒でしかない現実が、ごくたまにだけ確かに楽しかったり、それよりも遙かに悲しかったり。

詰まる所、やっぱり単なる我が儘なんだろう、きつと。

頬から力の抜ける感覚がする。睡魔はもう、こちらの背中へと触れていた。